

## 山本芳翠氏の逸話(下)

(黒田清輝畫伯談)

▲氏の性行 君は中々の奇行がある始めて東京へ来た時などは單衣物一枚に金が僅かしかなく困つた時は兵兒帶か何かに繪を畫いて賣つた話もある金も相應に取れたらうが錢遣ひが綺麗だ、色々な道具の好みがあつて夫れを見ると何が何でも買ひたくなると云ふ方である、君の性格は非常に無邪氣で洒落で殊に恩に感じ易い先づ子供の大きなやうなものだ、感情の強い人だから自分の世話になつた人には痛く恐れ入る夫れに若い中は餘程の難義をした人だから自然と卑屈野卑になると云ふ傾きも人にはあるものだが君には少しもそんな事はない殊にお上に對しては大變な尊敬心を持つて居つた、國民としては殊に其度の發達してゐる人で自分のは同じ宗教でも天皇教を立てやうと云つて居られた

▲多藝多能 君の多藝多能は驚く可きもので指先きの事なら何でも出来る殊に美術品なら何でもやる、繪畫に一番近い彫刻などでも小さい銅像や虎などがある、今ま畫室に遺物として残つてゐる觀音は蠟細工で出来たもので君が京都で製作中私も往つて見た事があるが自分で蠟を拵らへて非常な暑い中に働らいて居つた、盆栽も得意で澤山ある盆石にも好みがあつて自分でも拾ひに往く、自分も京都から歸りに鴨川石を土産にした事がある、夫れから不思議な好みは色色な藥を集めて製造する事で畫室には藥瓶が澤山並んでた、先達ての話でも佛國で臭氣止を發明し專賣特許として特許權は友人の許にあると云ふ話であつた繪の具なども色々試みたので最近のは眞菰の花

で墨を拵へて試験中だ、色は非常に好いが皿の縁に付けると滑かでなく寄のが困ると云て居た

▲背景畫の先祖 君が佛蘭西にある中にジュリエット・ゴーチエと云ふ女文學者の知遇を得た女史は日本好きの人で君の畫室には此人の肖像がある、佛蘭西に居る中に芳翠君が畫を書き女史が詩の様な短文を添へて出版したところがある、君の芝居の趣味も亦た澤山なもので彼國あちらに居た間も巴里でオペラの道具立てから劇場の構造其他芝居に關係の事は毎日通つて研究してた、想ふに歸朝後は日本の芝居に一大改良を試むる覺悟であつたらうが時期が早くて適しなかつた、君はまだ聲色にも日本の芝居にも通じて居つた、背景を始めて畫いたのが下田歌子女史の實踐女學校園遊會の時の活人畫の背景で其後明治座其他二三回も畫いた、背景改良の先驅をしたのが實に君で漸く演劇が盛んになつた今日之れからが君の腕を振ふべき時であつたらうに惜い事をした、之れ丈け繪畫界に功勞ある人だから外國なら最少し政府で優遇もしたらうが日本では仕方がない、一生貧乏で終られたは氣の毒な次第である。(完)

『日本』明治三九年一月三日